

2173再構築 28

フロット

「自由を捨てるとき」

エリー

プロット「自由を捨てるとき」

12歳ながら、なんでもそつなくこなせて、人々から期待されるAがいた。
Aは期待されることが重荷で、村から逃げたいと思っていた。

Aの同級生のBは、鈍くさくて、不器用で、怒られてばかりいた。
Bは村人からなんの期待もされていなかった。

AとBの差が歴然と現れるのが、狩りの時だった。

いつもAの的確な作戦と指揮により、成功をおさめた。

Bは、同じことを繰り返すだけで、状況に対応できず、危険な場면을何度も作って、叱られた

。

そんなとき、いつもAがBをかばっていた。

この国では、13歳になると管理区に集められて、3年間寮生活をして、工業勤務をすることになっていた。

保護区と呼ばれる村を離れるため、退村式が行われた。

人々は、Aが戻ってきて村を栄えさせてくれることを期待し、「待っているからね」と口々に言葉をかけた。

Bには誰も期待しなかった。それどころか「失敗して、村の恥をさらすな」と吐き捨てるように言うものもいた。

しかし、Aは自由区行きを宣言し、村に戻ったのはBだった。

村人たちはあからさまにがっかりした。

自由区と呼ばれる都会に出たAは、自由を満喫した。

会社でも自分がまかされた仕事だけして、人と関わらないで気楽に生きた。

そして、歓楽街で夜な夜な遊びまわって享樂的な暮らしをした。

そのころBは、村人一人一人の話を聞き、しかし、どうしたらいいのか分からず、オロオロしていた。

「あんたに言ってもどうにもならないけど」といつも最後はあきらめられてしまう。

時が流れ、それまで区長をつとめてきた人が引退することになった。

年齢や任されている仕事を考えると、Bしか区長を引き継げる人がいなかった。

誰もが不安に思い、Aの帰還を待ち望んだ。

実際にAに連絡をとり、懇願するものもいた。

B自身も、自分の手には余ると感じて、自由区までAを迎えにいった。

AはBに自由の素晴らしさを体験してもらおうと、歓楽街を案内した。

どんなに誘惑しても、Bは村の方がいいと言った。そして、Aに村に帰ろうと誘うのだった。

Aは「俺は、俺の生きたいように生きる自由がある。誰にも命令できない！」とBの誘いを断った。

村に戻ったBは、指示を求められても、どうしたらいいのか分からなかった。

とりあえず、思った通りにやってもらって、誰かが苦情を言ってきたら、頭を下げて謝り、やり方を変えてもらうことでなんとかしのいでいた。

誰もが、Bにがっかりして、バカにした。

自分のことだけして、会社のこと、仕事仲間のことも気にせず、気楽に好き放題をして過ごしたAはとても愉快だった。

自由とはなんてすばらしいものだろうと思った。

しかし、気づかない間に少しずつ孤立していた。

他人のことに心を砕き、失敗しながら、挑戦し続けたBは、経験を積んで少しずつ、分かること、できることが増えていった。

誰より村の事情に詳しくなっていた。

しかし、失敗はなくならず、Aならばどうしただろうと思わない日はなかった。

AとBはともに39歳になった。

保護区には40歳までに戻らなければならない。

Aはこのままずっと自由区で好き勝手に生きるつもりだった。

BはどうしてもAを連れ戻したいと考えていた。

会社で孤立したAは、ある日、唐突にリストラされた。

絶望したAは、死の街に迷い込んだ。

しかし、どうしても怖くて、3日のうちに死ぬことができなかった。

そこへ、Aを探しに来たBが現れた。

Bはただ、「一緒に帰ろう」とだけ言った。

村に戻ったAは、計画の立案を任された。

村人たちは、Aの意見に賛成はするものの、いろいろ事情を言って抵抗した。

そこでBが、細かい問題に答えると、人々はようやく納得した。

そんなことが続いて、自信を失ったAはBに言った。

A「俺はこの村には必要ない。都会で死ぬべきなんだ」

B「今まで、まずは好きにやってもらって、ダメな時にどうするか話し合ってきた。やる前に考えることは俺にはできない。みんなも助かっている。お前はこの村に必要な人間なんだ。どうかいてくれ」

BはAに頭を下げた。

A「やめてくれ。俺はできることをしてこなかった。重荷を背負うことから逃げて、自由こそ全てだと思って生きてきた。だが、お前を見ていて分かった。すごいのは重荷から逃げなかったお前の方だ。俺は意気地なしのバカだ」

B「バカは俺だ。しかし、ヒャクできなくても、ゼロでなければいいとイチを積み重ねてきた。ところが、俺が、長い時間かけて積み上げてきたことを、お前は一瞬で超えるんだからかなわないよ。みんなが期待した通り、お前が区長を引き受けた方がいいと思う。なあ、そうしてくれ」

A「いや、自分のことより、まず村を考えるお前こそが区長にふさわしい」

B「そう思ってくれるなら、区長としての頼みを聞いて欲しい。どうか村に残って、村のために力を尽くしてくれ」

A「自由を捨ててみるのも悪くないかもしれない」

B「ありがとう」

握手するAとB。

あとがき「主張するって難しい」

元ネタは、2017年5月29日にしたツイート。

「議論のレッスン」という本を読んで、一つの主張を選んで、関わりのあることに限定して掘り下げないと、何が言いたいのか分からないことが分かったから、ためしにプロットを書いた。

事実を並べただけでは退屈。どちらかの立場を選んで、そういうエピソードを考えないといけない。

変化していくだけでは、考えは深まらないし、どうでもよくなって読みたくなくなる。

「重荷から自由になる」があって、「重荷を背負って自由を捨てる」という変化が意味を持つ。
ただ変化させただけでは、とりとめなくて、意味がない。

そんな簡単なことに何年も気づかず、どう推敲していいのかわからなかったわたしは、Bそのもの。

失敗するまで問題に気づかない。

プロット「自由を捨てる時」を読んだら、「いや、都会で重荷を背負って頑張っている人もいるよ」とか、「田舎で享楽に耽ることだってあるでしょ」って言われると思う。

でも、「ヒヤクできなくても、ゼロよりイチ。続けることには意味がある」という主張を表現するためには、このプロットに落ち着く。

議論には、「論理的に判断する」という部分と「対象とする問題について詳しい」という部分がある。

「自然に論理的に考えられる＝頭がいい＝ウサギ」は、努力ではどうにもならない。

しかし「対象について詳しくなり、経験から学ぶ＝カメ」は、努力でどうにかなる。

ウサギとカメが本気で争ったら、ウサギが勝つ。

しかし、ウサギは休む。

そこで、「休まないウサギの話」を持ち出しても、「コツコツ続ける大切さ」は訴えられない。

「2173再構築」という世界は、「休まない最強ウサギになれ！」と言っても、「カメはウサギ

にはなれないだろ!？」が言いたいことなのかもしれない。

まだ何が主張したいのか、疑問が渦巻くばかりで答えがでない。

休まない最強ウサギは、自由区に出て、外と戦ってもらいたい。

休むウサギと歩き続けるカメが協力して、休みがちなカメを励まし、みんなで一緒に暮らしていく世界が保護区。

では、走らないウサギや、歩かないカメをどうするのか？

それをわたしは感情で考えるから答えが出ない。

「国を強くし、より良い状態を保つ」と理屈で考えたら、「それは悪いこと」となり、処罰の対象となる。

「保護区に入れない」から「行き詰ったら死の街で死ぬしかない」が罰となる。

何かを強制したら、人権や自由という現代的な考え方と相反する。

だから、「放任する」というやり方に落ち着いた。

潔く死ぬことを選ばず、盗みや恐喝などの犯罪を犯したら、犯罪者として罰する。

潔く死の街で自ら死ぬことを選んだら、速やかに死体を処理する。

その判断が正しいのか分からないが、決定を下さなければならない。

現実にそうしろ、と主張しているわけじゃない。

このお話の中ではそうします、というだけなのに、かわいそうに思って決められない。

グルグル悩み続ける。

しかし、結論を出さねば書くことはできない、と分かって言い切る覚悟が決まった。

この話をプロットとしてシナリオにしなかったのは、もっと書きたいことがあるから。

足が遅くてもできる仕事をウサギが選んで、走れなければできない仕事をカメが選んでも、「好きをきわめろ!」と言えるだろうか？

ウサギには走れなければできない仕事をしてもらい、歩けばできる仕事をカメにしてもらうことが、適材適所であり、本人のためではないだろうか。

しかし、その判断は難しい。
でも、向き・不向きは確かにある。

小学校で一番だから、「俺は頭がいい＝ウサギ」と思って中学受験をして進学校に入ったら、「俺は頭が悪い＝カメ」と気づくこともあるかもしれない。

「わたしは頭が悪い＝カメ」だと思っていたのに、わたしには自然に分かることが分からなくて困っている人に出会って、「できることはある＝ウサギ」だと気づくかもしれない。

人間関係の中では、ウサギになったり、カメになったりする。

だから、「可能性は誰にも否定できない」は確かに正しい。

どこかに居場所はある。

しかし、できないことがあるのも確かだ。

「話を聞いただけで、先の予測をして、どう行動するのが有利か分かる」など「ルールを察知し、作戦を立て、指揮する」という男性的な能力は、性別に関係なく、ある人はあるし、ない人はない。

策があって、勇気もあったなら、行動するだろう。

認識が正しく、対処も正しいなら、運が悪くない限り、よい結果がでる。

なんの策もなければ、他人のやり方を真似ることになる。

「ついていきます！」という状態になる。

一人でできないことなら、自分の策を信じて、「ついていきます！」と言ってくれる協力者は大切だ。

運命を共にする。

「誰もが、策の善し悪しを論じ合える」という考え方に疑問を持つ。

なぜなら、わたしは何度挑戦しても、できたためしがないから。

それがなぜなのか分からなかったが、「理論より感情」だからと指摘されて納得した。

「優秀だからって重荷を背負わされるのは辛いよね」と思ってしまうから、答えが分からなくなる。

「背負えるだけの重荷は背負わなければならない。なぜならば、無限の自由など幻想だから」

と言い切って、それにそって人物を造形し、エピソードを拾えば、読んだ側は言いたいことが分かるかもしれない。

模索中なのでそれで正しいのか分からないが、「理屈（主張）が先。それに伴う感情は後から拾う」という方針で試してみようと思う。

今はまだ迷っていて、「あんなことやこんなことがあるよね」と思っているだけで、「だからどう」と結論がない。

主張するって難しい。